

第 2 章

非対称の伽藍構成を有する

ヒンドゥー教寺院の成立過程について

はじめに

中部ジャワ期(8世紀前半頃～10世紀前半頃)におけるチャンディ造営の主たる舞台となった中部ジャワ地方一帯は、遺構の地理的な分布状況から、次の二地域に分けることができる。まず第一の地域は、プラフ山南麓のディエン高原やウガラン山西斜面など中部ジャワ北部の山間地であり、なかんずくディエン高原には、ジャワ最古とされる一群のシヴァ教の遺構が現存している。そして第二に、中部ジャワ南部の河川(プロゴ河、オパック河)の流域に広がる肥沃な盆地ないし平野部を中心とする地域が挙げられる。

第1章で既に述べたように、上記の第二の地域、すなわち中部ジャワ南部の盆地ないし平野部を中心とする地域には、一見して左右対称の伽藍構成を遵守しているようにみえて、実際はわずかにその対称性が崩されているシヴァ教の寺院建築遺構が集中して残されている。非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の内、中部ジャワ期に造営されたものとして、チャンディ・サンビサリ、チャンディ・ロロ・ジョングラン、チャンディ・グヌン・ウキル、チャンディ・グヌン・サリ、チャンディ・イジョー、チャンディ・バドゥが挙げられる。

囲繞壁及び境界石等の指標物で二重に結界された敷地内に、シヴァを祀る主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂を配し、また敷地中心点が、主祠堂の正面階段翼壁と基壇の交差する隅の部分に一致する。また祠堂群は全体に北側へずらされる等の基本的な構成は、上に挙げた各寺院に共通して認められる特徴である⁽¹⁾。またこのような非対称伽藍は、後の東部ジャワ期のシヴァ教チャンディにもそのまま継承されており、様式的にも確立された伽藍型式であったと言える。そしていずれの遺構に関しても、囲繞壁の変更や副祠堂の増設等を裏付ける証跡に関する報告が今日まで確認されない点を併せて考慮すれば、上記のシヴァ教寺院における囲繞壁、主祠堂、副祠堂の建立時期を、敢えて異なるものと見なす理由は見当たらない。それでは、こうした非対称伽藍は、中部ジャワ南部でいつ頃、いかなる発展過程を経て成立したのであろうか。

この問題を検証する試みはこれまで殆ど皆無であり、後に述べるように、かろうじてジャック・デュマルセが、従来の中部ジャワ政治史に依拠した見解を短く述べているに過ぎない。さらに、ディエン高原のシヴァ教の遺構群をジャワ最古のものとするのは従来からの定説である一方で、それらが発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせたのか、あるいは中部ジャワ北部とは系統の異なるシヴァ教寺院の建築様式が、中部ジャワ南部において並行的に展開したのかという問題に対する考察も十分に行われているとはいえない⁽²⁾。

従って本章では、先ず、中部ジャワ史に関する従来の諸説に鑑みながら、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の内、最初期のものと考えられる遺構の建立年次の再検証を行う。次に、中部ジャワ南部を中心に造営されたそれらのシヴァ教寺院と、中部ジャワ北部のシヴァ教寺院の建築様式とを比較対照した上で、前者の寺院建築様式が成立するに至った経緯の一端について明らかにしたい。

第1節 中部ジャワ期におけるチャンディの造営と史的背景

これまで、8世紀以後の中部ジャワを支配していた統一王朝については、ヒンドゥー教徒(特にシヴァ教)のサンジャヤの王統及び大乘仏教徒(特に密教)のシャイレンドラ王朝という二つの政権の存在を認める説(二王朝説)が有力視されていた。先ず、プロゴ河流域を中心とするクドゥ南部地域から出土した西紀732年の碑銘を有するチャンガル碑文と、同じくクドゥ南部出土の907年の銘ある碑文の二つにより、サンジャヤと称する王を始祖とし、シヴァ教を信奉する王国が中部ジャワ南部に存在していたことが知られる。次に、シャイレンドラの名が登場する最初の碑文は、オパック河の流域平野を中心とするプランバナン地域近傍のカラサンから出土し

た778年の銘あるカラサン碑文であるが、同じくプランバナ地域（現バタヴィヤ）のクルラクからも782年の銘あるクルラク碑文が出土しており、その碑文にもシャイレンドラの名が見えることにより、8世紀後半には仏教を奉じるシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に存在していたとされている。また、シャイレンドラの名を伝える三碑文が、ジャワ以外の地からも発見されている。

ドゥ＝カスパリスは、上記の碑文以外に新たな史料を加えて詳細な検討を行い、シャイレンドラ王朝とサンジャヤ王統との関係について新しい一石を投じている⁽³⁾。その論旨を要約すれば、次のようになる。

先ず8世紀の前半には、クドゥ南部を中心にサンジャヤ王が勢力を持っていたものの、8世紀の後半にはシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に覇権を確立する。サンジャヤの王統は、クドゥ南部へと進出したシャイレンドラ王朝に次第に押され気味となり、第三代のパヌンガラ王（780年頃-800年頃）の治世以後は、主として中部ジャワ北部の経営に集中するようになる。しかし832年頃までには、それまでシャイレンドラ王朝に対して従属的な立場に甘んじていたヒンドゥー教勢力がその支配から脱し、婚姻による両王朝の融合にもイニシアティブを取った結果、842年頃までにシャイレンドラ王朝の権威は失墜し、中部ジャワ南部は再びサンジャヤ王統の支配するところとなる。

カスパリスは、カラサン碑文（778年）に述べられたパナンカラン王をシャイレンドラ王朝出身とする旧説を排し⁽⁴⁾、同人はサンジャヤの王統第二代の王で、シャイレンドラ王家に服属していたとする。この点については岩本氏も詳細に指摘しているところであり⁽⁵⁾、本論ではその詳細には立ち入らないが、カラサン碑文のいう仏教寺院と僧院の建立、また僧院の維持のためのカーラサ村の寄進は、自らはヒンドゥー教徒であったパナンカラン王が、仏教王朝シャイレンドラへの帰順の証として行ったものという理解に基づいている。

一方、クドゥ最北端の地で発見された832年の銘を有するガンダスリI碑文では、パルタパーンと称する王が、広大な領域に君臨する王としての権威を宣言している。ドゥ＝カスパリスはこのパルタパーンを、カランテンガー碑文（824年の年次を有する）中のパタパーン王と同一人とし、さらにその王を、疑問符を付しながらではあるが、マンティヤシI碑文（907年の年次を有する）に述べられたサンジャヤ王統の第五代ガルン王に同定する⁽⁶⁾。またカランテンガー碑文において、シャイレンドラ王朝のサマラトゥンガ王及びブラモダワルダニー王女が建立した祠堂に、パタパーン王が土地を寄進したと記されていることにより、824年の段階では、まだパタパーン王はシャイレンドラ王朝に服属していたとする⁽⁷⁾。しかし一転して832年、同王はガンダスリI碑文を公布し、中部ジャワの広大な領域の支配権を高らかに謳っており、すなわちシャイレンドラの勢力は終焉を迎え、サンジャヤの王統もその従属から脱したものとする⁽⁸⁾。さらにその10年後の842年には、ある1人の皇后がブーミサンバーラという名の仏教建造物に寄進をしており（マグラン碑文）、このように土地寄進に際して皇后が命を下すことが極めて稀であることから見て、この時点でシャイレンドラの勢力が終焉していたこと可能性は高い、とドゥ＝カスパリスは解釈している⁽⁹⁾。

また彼は、842年の年次を有するチャンディ・ペトゥン碑文中のシュリー・カフルナンについて、この人物が祠堂に土地を寄進していることに着眼し、さらに「カフルナン」という語が“皇后”を意味することにより、同人をサンジャヤの王統に嫁いだシャイレンドラ王家出自のブラモダワルダニーに同定し、すなわちジャワにおけるシャイレンドラ王家の衰退を結婚による権力の委譲に求め、最終的に二王朝は一体化したとの結論を得ている⁽¹⁰⁾。

1950年に提出された上記のカスパリスによる二王朝説は、半世紀以上を経た今日もなお、通説として一定の支持を集めている。その一方で、中部ジャワ北岸のプカロガン市近傍のソジョムルト村から発見された、7世紀前半頃のものであるとされる古マライ語の碑文中にみえる、ヒンドゥー教の熱心な信奉者であるSelendraという個人の名を、シャイレンドラ王朝の直接の祖先に比定す

ることにより、中部ジャワ期の統一王朝は唯一シャイレンドラ王朝のみであったと見て、また歴代の王はヒンドゥー教か仏教のいずれかを選択して信奉し、改宗の自由も保証されていたとする、いわゆる一王朝説も提唱されている⁽¹¹⁾。やや解釈に無理があると言われつつも、このような説すら単なる憶測として退け得ない点に、中部ジャワにおける政治史の解明がいかに難渋してきたかが集約的に表れているといえるだろう。

しかし比較的近年の碑文研究の成果は、全く異なる枠組みの中で、中部ジャワ政治史の再構成を試みている。ドゥ＝カスパリスは、幾つかの限られた数の刻文資料の記述を巧みに繋ぎ合わせて二王朝説を提唱したが、その解釈に幾分無理な点のあることも指摘されており（例えばカランテンガー碑文、ガンダスリI碑文中のパタパーンおよびパルタパーンを同一人とした上、それをサンジャヤ王統の第五代ガルン王に同定するなど）⁽¹²⁾、さらに新たな碑文研究の成果は、刻文を発した全ての地方権力の帰属をその二王朝に求めるよりも、むしろ8世紀には多数の地方権力が各々の王宮を構え、いわゆる統一王朝は存在しなかった、つまり8～9世紀前半における中部ジャワにおける政治的権力の均衡は、統一王権による政治的統合が実現する前の段階、つまり分散的に併存していた多数の地方権力が統合されていく過程と捉えるべきものと主張している。そしてこの解釈は、中部ジャワ期の政治史の新たな枠組みとして、徐々にではあるが定説化される傾向にある⁽¹³⁾。

また一方で1983年に発見されたワヌア・トゥンガ第三刻文は、従来の刻文資料では名の挙げられていなかった新たな王について語っており、また諸王の即位及び退位の年月日についての新たな情報を提供するなど⁽¹⁴⁾、今後も新たな資料の発見があれば、中部ジャワ政治史の書き替えが行われねばならないという問題も看過できない。

そもそもの中部ジャワ政治史が、ジャワ、スマトラ、マライ半島、インド等の各地で発見されている限られた数の刻文史料と、中国史書の記述とによって構築された多くの仮説を包含するものであり、さらに新史料の発見に伴って、今なお改訂される余地の残されているものである以上、史的背景に多くを依存したチャンディの編年論には、自ずから限界があると言わざるをえない。

このように、中部ジャワ政治史の再構築の必要性が説かれている中で、依然としてデュマルセは、ドゥ＝カスパリスの二王朝説を基調とした上で、中部ジャワ南部がシャイレンドラ王朝の支配下にあったと推測される780年頃から832年頃までにかけて、ヒンドゥー教チャンディの造営活動は中部ジャワ北部においてのみ行われたと類推した上、中部ジャワ南部に現存する主要なヒンドゥー教の遺構を、いずれも832年以後、つまりシャイレンドラ王朝の勢力没落後に建立されたチャンディとして位置付けている⁽¹⁵⁾。デュマルセの指摘に関して筆者が問題と考える点で述べるべきは、780年頃から832年頃までにかけてを、中部ジャワ南部におけるヒンドゥー教勢力の完全なる空白期と見なしている点である。その時期にシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に強い覇権を確立していたと見ることに異論はない。しかしその時期のヒンドゥー教勢力の活動の全てが、中部ジャワ南部以外の地に限定されていたとは、現存する刻文等の資料からは窺い知ることは出来ないし、ドゥ＝カスパリス自身にしてもそのように断定している訳ではない。彼がその時期のヒンドゥー教勢力の活動の場として中部ジャワ北部に言及しているのは、そこにジャワ最古とされるヒンドゥーの遺構群が残されているからである。しかし中部ジャワの南部にもヒンドゥー教の遺構は相当数残存している点に留意しなければならない。

中部ジャワのチャンディの創建年代を推定する上で、参照することの可能な刻文などの資料の数は著しく乏しいため、ある程度歴史的な背景からその創建年代を類推する必要がある。とはいえデュマルセが強調する二王朝の対立抗争史という図式は、チャンディの創建年代を類推する際に拠って立つべき歴史観としてはその根拠が脆弱であり、8世紀の第三四半期頃～9世紀の第一四半期頃の中部ジャワ南部におけるチャンディの造営活動が、仏教王朝によってのみ行われたと断定することは出来ないはずである。

ドゥ＝カスパリスの説が、ともすれば異宗を信奉する二王朝の対立的な関係を軸に論証されていたものであり、さらにデュマルセはさらにその点を強調して論を展開しているとも言えるのに対して、比較的近年の研究においてヨルダーン氏は、中部ジャワ南部における、二王朝の平和的な共存・共栄と二宗教の混淆とを主張している⁽¹⁶⁾。ヨルダーンが、この説を提示する際にとりわけ注目しているのは、先述のクルラク碑文である。この碑文には、東ベンガルから来たとされる師僧によって文殊師利の像が奉献されたことが述べられており、また「この高貴な持金剛はブラフマー神であり、ヴィシュヌ神であり、マヘーシュヴァラ神（シヴァ神）であり、一切の神々を含んだものである」との一節が認められる。石井氏は、この碑文のいう文殊を「持金剛」の文殊、即ち密教の文殊師利に比定し、そしてヒンドゥー教の三主要神さえもが、「仏智」の顕れとして認識されていたと考えられる点について言及している⁽¹⁷⁾。782年の年次を刻むこの碑文に、仏教とヒンドゥー教の意識的な混淆ないし融合が看取される点からみても、8世紀末以後の中部ジャワ南部に、両宗教を奉じる幾つかの王朝が併存していた可能性は、少なくとも否定されるべきではないであろう。

例えば岩本氏は、先述のカラサン碑文の記述内容を改めて吟味した上で、二王朝相互の関連に係わる問題についての従来の諸説に補訂を加えつつ、8世紀の後半以後、シャイレンドラ王朝はプロゴ河流域に広がるクドゥ南部地域に、またサンジャヤの王統はオパック河以東、すなわちその流域平野であるプランバナン地域を中心とする領域にそれぞれ勢力を分け持って併存していたと考えられることを指摘している⁽¹⁸⁾。二王朝説に依存する岩本氏にしても、8世紀後半以後の中部ジャワ南部において、両王朝は併存していた可能性が高いと考えている。

780年頃から832年頃までを中部ジャワ南部におけるヒンドゥー教勢力の完全なる空白期とみなし、その時期に二王朝が中部ジャワ南部において併存していた可能性を予め否定してチャンディの建立期を推定している点は、再考を要するものとする。

上記の留意点を踏まえながら、以下、非対称の伽藍構成を有するチャンディの内、最初期の遺構に属するとみられるチャンディ・グヌン・ウキル及びチャンディ・バドゥの建立年次について、デュマルセを含めた諸氏の見解を改めて検証することにしたい。

第2節 チャンディ・グヌン・ウキルの建立年次の再検証

チャンディ・グヌン・ウキルは、クドゥ南部のチャンガル村付近のウキル丘上に建立されたシヴァ教の遺構である。グヌン・ウキルの伽藍には、他の非対称の伽藍構成を有するチャンディと同様に、リング・ヨーニを安置する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置されている（図13）。これらの祠堂群を取り囲む煉瓦造の囲繞壁は現在埋め戻されているために、現状の遺構から祠堂群の「ずらし」を確認することはできない。しかしながらグヌン・ウキルの敷地中心点が避けられていたことは、スクモノ及びバーネット＝ケンペルスによって確認されている⁽¹⁹⁾。

同遺構の建立年次については諸説あるのが現状であり、例えばフォグラ－は、チャンディの装飾細部としてもっとも普遍的なカ－ラ・マカラ装飾（出入口や龕の額縁の装飾意匠に用いられるモチ－フ）の形態を比較対照して諸遺構の編年を試みた上で、グヌン・ウキルの建立年次を928年以後に位置付けている⁽²⁰⁾。グヌン・ウキルの建立年次を巡って常に論議の対象とされるのは、先述のチャンガル碑文の記述である。碑文はその書き出しにおいて、サンジャヤ王が732年に山上にリングを建立せしめたと記している⁽²¹⁾。しかしフォグラ－は、碑文の発見地がグヌン・ウキルの寺苑から南へ150メートルの地点と距離的に離れすぎているとして、グヌン・ウキルの建立年次と碑文の記述とを関連づけることを否定している⁽²²⁾。

それに対しスクモノは、フォグラ－が得た碑文の発見地に関する情報は、1937年に近隣の村民から得た伝聞を根拠とするものに過ぎず、情報としての信頼性に欠ける点を指摘している⁽²³⁾。

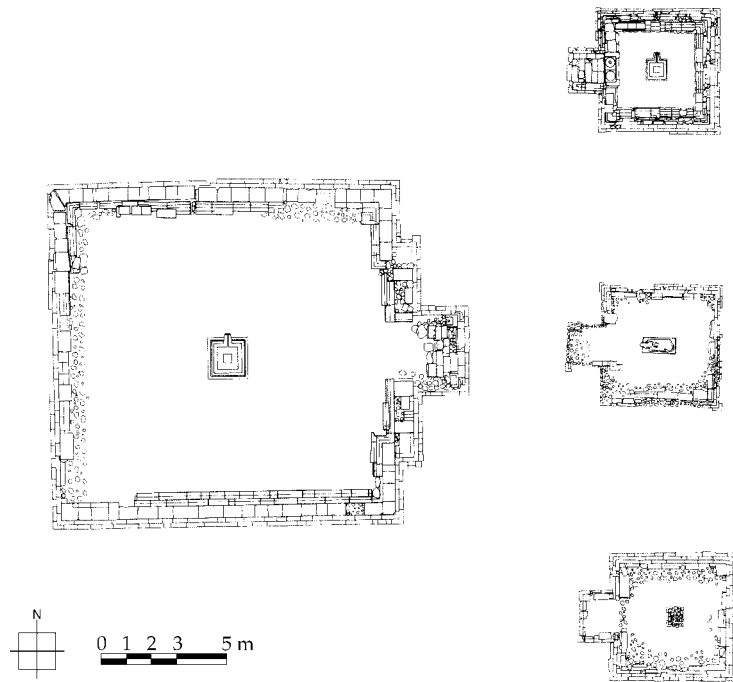


図13 チャンディ・グヌン・ウキル 配置図

チャンガル碑文は、元々 1879 年にグヌン・ウキルの門の傍から発見されていることがクロムによって指摘されており⁽²⁴⁾、また当時の古代遺跡・遺物目録にもそのように記されている⁽²⁵⁾。さらにスクモノは、チャンガル碑文の欠損部分が、1937 年にグヌン・ウキルの寺苑内から発見されていることを指摘した上で、碑文の内容とグヌン・ウキルの建立との関連は明らかであると結論付けている⁽²⁶⁾。また、グヌン・ウキルは小丘の頂部に建てられており、その立地は「山上にリングを建立せしめた」との碑文の記述に符節するものである。

チャンガル碑文は、年次を有する碑文としてはジャワ最古とされるものであり、ここでスクモノの説に従うならば、グヌン・ウキルは、中部ジャワ南部に現存する全てのチャンディの中で、最初期の遺構に該当することになる。グヌン・ウキルの建立年次を、碑文に銘記された 732 年に比定するスクモノの解釈には千原氏も同調しており、また千原氏は、カ・ラ・マカラ装飾にのみ限定して建築の編年を試みるフォグラ - の方法の限界をも同時に指摘している⁽²⁷⁾。

しかし一方で、先のフォグラ - の説に同調するデュマルセは、グヌン・ウキルの建立年次を 832 年以後の間もない時期に位置付けている⁽²⁸⁾。このことに関連してデュマルセは、ポロブドゥール造営の第 2 期（782 年頃～792 年頃）に認められる、垂直面に僅かな相決りを施して重ねられる切石積みの工法が、グヌン・ウキルにも用いられている点について言及している⁽²⁹⁾。しかしチャンディ・セウ造営の第一期（760 年代後半頃～778 年頃）において既にその工法が認められる点は、デュマルセ自らが指摘していることでもある⁽³⁰⁾。従って、グヌン・ウキルがポロブドゥールの切石積み工法を踏襲して、782 年以後に造営されたとは必ずしも断じ得ないはずである。

またデュマルセは、隣接する数個の石の間隙に楔石を打ち込んで、周辺の石同士を緊密に結合させる切石積み工法が、前述のサンピサリには頻用されているのに対して、グヌン・ウキルにはその工法が用いられていない点を指摘している⁽³¹⁾。さらに、グヌン・ウキル及びサンピサリには、ロロ・ジョングランやイジョー等に認められる、二重の安山岩の化粧材の内部を火山性凝灰岩で充填する壁工法が用いられていない点についても言及している⁽³²⁾。

このように、グヌン・ウキルが比較的古い工法で築造されているとみられる点に鑑みれば、グヌン・ウキルの建立とチャンガル碑文の内容との関連を是認し、グヌン・ウキルを中部ジャワ南

部で最も古い型の遺構とみなすことに、本来大きな問題はないものと思われる。にもかかわらずデュマルセが、グヌン・ウキルと碑文の内容との関連を否定するのは、グヌン・ウキルにおける非対称の伽藍構成を、832年以後のヒンドゥー教勢力の復興に伴ってインドから将来された新しい配置型式とみているからであると考えられる⁽³³⁾。

しかしながらその見解は、先に述べたドゥ＝カスパリスの説から類推された一つの憶説に過ぎず、具体的な根拠に基づいて実証されているものではない。すなわち、その推測のみをもって、グヌン・ウキルと碑文の内容との関連を否定するのは、根拠が不十分であるといわざるをえない。上記の諸点に鑑みて素直に解釈すれば、グヌン・ウキルの建立年次は、チャンガル碑文に銘記された732年とするのが、最も妥当であると考えられる。

第3節 チャンディ・バドゥの建立年次の再検証

東部ジャワのマラン近郊に現存する中部ジャワ期の遺構として知られるのがチャンディ・バドゥである。バドゥの伽藍には、リング・ヨーニを安置する西面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置され、それらをほぼ正方形をなす圍繞壁が取り囲んでおり、また祠堂群は北側にずれて配置されているのが確認される（図15）。

ところで、マラン近郊のディノヨからは、760年の銘のある、いわゆるディノヨ碑文が出土している。碑文にみえるアガ스티ア（尊師の姿をとるシヴァ）に捧げられた建造物を、バドゥと同定するか否かについて、カーラ・マカラ装飾を編年の資とする既述のフォグラールは、遺構と碑文の発見地とが離れすぎていると疑問視し、結果、バドゥの建立年次を中部ジャワ期の最末期（10世紀初め頃）に位置付けている⁽³⁴⁾。他方スクモノは、バドゥの建築全体の様式が中部ジャワ期の古い型を基調とするものであり、また造営第一期のチャンディ・カラサン（778年）やチャンディ・グヌン・ウキルと同様に、バドゥが線形や浮彫りを一切有しない平滑な断面からなる基壇を持つことからみて、760年をそのまま建立年次とするのは無理とはいえ、8世紀中頃の建立とすべきとの見解を示している⁽³⁵⁾。また千原氏も、このスクモノによる解釈に同調している⁽³⁶⁾。

しかし一方でデュマルセは、バドゥとディノヨ碑文との関係を大筋で認め、バドゥの建立年次を8世紀中頃とする解釈を認めるものの、9世紀に入りその伽藍配置には変更があったと推測している。デュマルセによれば、創建期のバドゥは、中心線AA'-CC'（図14）からなる方形の伽藍を有していたのに対し、寺院敷地の中心点を避けるべく圍繞壁が改変され、中心線BB'-CC'からなる伽藍が新たに創出されたという⁽³⁷⁾。なお、D及びEの箇所に置かれているものは、上部中央に正方形の穴が穿たれたおよそ50cm四方の切石である⁽³⁸⁾。

しかしながら既述のように、圍繞壁の改変を裏付ける証跡に関する報告は今日までないという

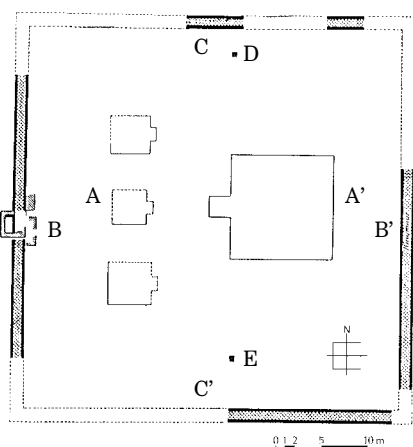


図14 チャンディ・バドゥ 配置図（オランダ領東インド考古局による）

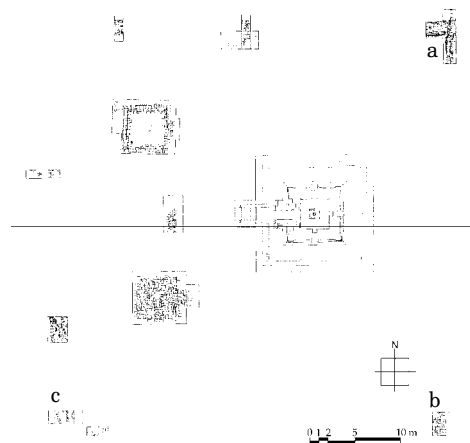


図15 チャンディ・バドゥ 配置図（インドネシア教育文化省東部ジャワ州事務所による）

のが実情である。また筆者が現地で測量を行って検証した結果、オランダ領東インド考古局によって作成された図14は、インドネシア教育文化省東部ジャワ州事務所による図15（原図の縮尺が1/100）と比べ、十分な精度を有するものではないことが確認された。両図を比較すると、敷地中心点や副祠堂の位置関係が相当異なっていることが理解される。すなわち、建築学的な分析に必要な精度を有しない図14を根拠として、圍繞壁の改変の有無を論議すること自体に問題があるといわざるをえない。

また図15を見ると、バドゥの敷地中心点は、主祠堂の正面階段翼壁と基壇が交差する隅の部分にほぼ一致しており⁽³⁹⁾、これは他の類例にも共通して認められる特徴であることは既に指摘した通りである。さらにこれらの遺構の伽藍には、いずれもシヴァを祀る主祠堂に正対して三基の副祠堂が配置されている他、バドゥの敷地の南北から出土した台座状の切石（図14のD、E）は、チャンディ・サンビサリ等の寺院敷地の四方四維に位置する地点に配せられた、結界を示す指標物に類するものとみることが可能である。すなわち、他の類例に認められる伽藍配置上の特質が、そのままバドゥにも共通して認められる点に鑑みれば、バドゥがその創建時において、既に非対称の伽藍構成を有していたとみなすことには少しの不合理もない。さらに、732年の建立と推測されるグヌン・ウキルにおいて、既に非対称の伽藍構成が認められるのであるから、追って8世紀中頃に建立されたと推測されるバドゥにも、グヌン・ウキルと同様の配置型式が用いられたと考えることにも矛盾するところはない。

第4節 中部ジャワ北部山間地のシヴァ教寺院との比較

1. ジャワのシヴァ祠堂の祖型としてのチャンディ・アルジュノ

ジャワのチャンディの編年論は、研究者によって結論が大きく異なるのが実情であるが、ディエン高原のチャンディ・アルジュノ（Candi Arjuna）をジャワ最古の遺構とみる点に限り、大方の研究者の見解は共通している⁽⁴⁰⁾。アルジュノが最も基本的な型式からなる祠堂であると考えられることは、千原氏によってすでに指摘されている⁽⁴¹⁾。この点について改めてまとめてみると、まずその建築構成は、最下層の台状の基壇の上に函状の身舎を載せ、さらにその上に載る迫出し構造からなる屋蓋は、身舎の側壁と同じ構成を持った函形を段台状に数層積み上げたものとなっている（図17）。身舎及び屋蓋の段台の各層の軒先の四隅には、宝冠状のラトナと称するユニットが配せられる。また現在は消失しているものの、屋蓋の最頂部にもラトナが配せられていたと

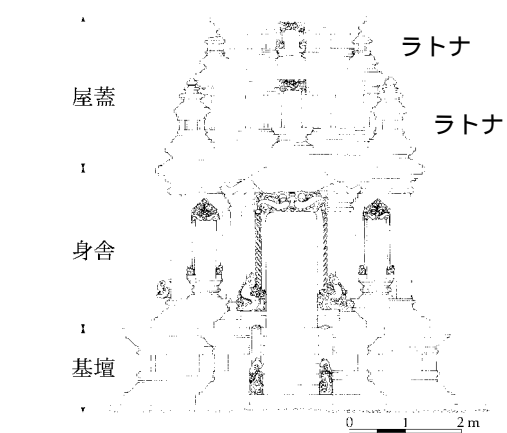
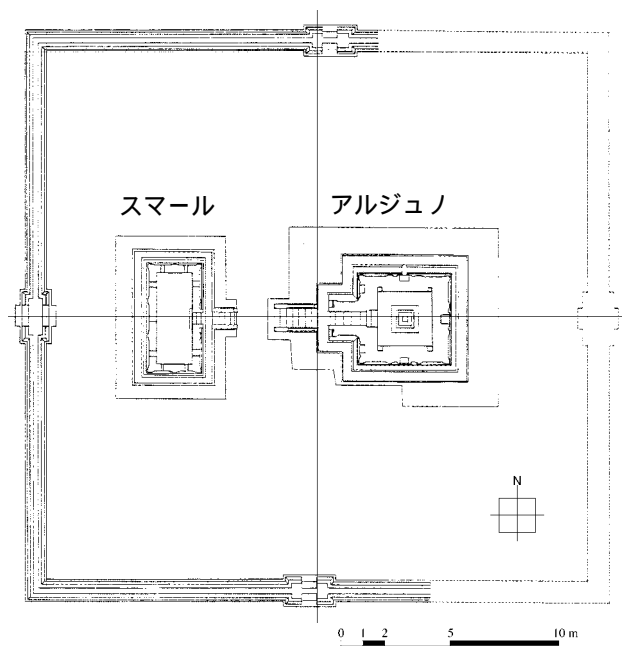


図17 アルジュノ立面図（西）

図16 チャンディ・アルジュノ、スマール 配置図

考えられる。身舎は正面にのみ入り口をもち、内陣にはリング・ヨーニが安置され、また入り口の両脇と残り三方の壁体外面の中央には壁龕が付され、またその中に、現在は消失しているものの、各々一尊ずつの尊像が安置されていたと考えられる。そして入り口や龕の頂部には、カーラと称する鬼面像が、またそれらの竪柱の下端には、マカラと称する像が浮彫りされている。ジャワのチャンディの大部分を占める祠堂の殆どは、その建築構成・細部意匠などいずれをとっても、アルジュノを祖型とする変化形とみることが可能である⁽⁴²⁾。

2. シヴァ祠堂の尊像配置にみる規範性

中部ジャワの北部及び南部のシヴァ祠堂の主房及び壁龕（ないし側・後房）に安置される彫像の配列にも、共通の原則が看取される。中部ジャワ北部、ウガラン山西斜面のグドン・ソongo（Gedong Songo）の第三コンプレックスの主祠堂の身舎に穿たれた壁龕には厚肉浮彫りの像が残っており、まず、正面入り口右の龕にはマハーカーラ、左にナンディーシュヴァラ、背面（東）の龕にガネーシャ、北にドゥルガー、そして南にアガスティアの像が各々安置されている。これらシヴァの変化相ないしその眷属の像の配置は、シヴァ祠堂における尊像の典型的配置とされるものであり、この後チャンディ・ロロ・ジョングランのシヴァ祠堂を始め、非対称の伽藍構成を有するチャンディのシヴァ祠堂にもこの尊像配置の原則が用いられている⁽⁴³⁾。

ディエン高原のシヴァ祠堂において、既に上記の尊像配置の原則が認められたのかどうかは明らかではない⁽⁴⁴⁾。なぜなら、チャンディ・スリカンディ（Candi Srikandi）を除く祠堂の壁龕に安置されていた諸尊の像は現在すべて失われているからである。唯一、西面するスリカンディの南・北・背面の側壁の中央には、ピラスターで仕切られた浮彫りの像が現存し、北面のパネルには一面四臂のヴィシュヌ、南面には三面四臂のブラフマー、さらに背面（東）には一面四臂のシヴァが浮彫られている。こうした尊像の配列は、先述のシヴァ祠堂における尊像の典型的配置とは異なるものであるが、中央のシヴァの北側と南側に、それぞれヴィシュヌ及びブラフマーを配する図像的な構想は、チャンディ・ロロ・ジョングランに併祀された三尊の像を安置する祠堂の配置においても具現化されている。

以上、中部ジャワの北部及び南部のシヴァ教の祠堂の建築構成、細部意匠、そして尊像の配列には、一貫した規範性を看取することが改めて確認された。こうした原則が顕著に窺えることに鑑みれば、中部ジャワの北部及び南部に各々営まれたシヴァ教寺院は、基本的に系統を同じくする建築とみるのが妥当であると考えられる。

3. 伽藍配置にみる相違点

シヴァ神を祀るチャンディ・アルジュノは西面し、またそれに正対して矩形平面を有するチャンディ・スマール（Candi Semar）が配置されている（図16）。シヴァを祀る主祠堂に正対して矩形平面の建造物が一基のみ配置される伽藍の構成は、グドン・ソongoの第二コンプレックス、またディエンのチャンディ・スリカンディにも認められるものである（図18）。加えてディエンのチャンディ・プントデウォ（Candi Puntadewa）においては、主祠堂の背後にさらに一基の建造物が配置されており（図18）、またグドン・ソongoの第三コンプレックスは、主祠堂の両側にさらに二基の副祠堂を配置する伽藍構成を有している。シヴァ祠堂の正面に建造物が一基のみ配置される伽藍の構成は、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院には確認されないものである。既述のように、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の場合、主祠堂に正対して配置される副祠堂の数は三基となる。

アルジュノの正面に配置されたスマールの宗教的性格については明らかではないものの、デューマルセは、シヴァの乗り物であるナンディンの像が、創建時のスマールの内陣に安置されていたと推測している⁽⁴⁵⁾。シヴァ祠堂の正面にナンディンを祀る副祠堂を配する祠堂の配列は、非対称

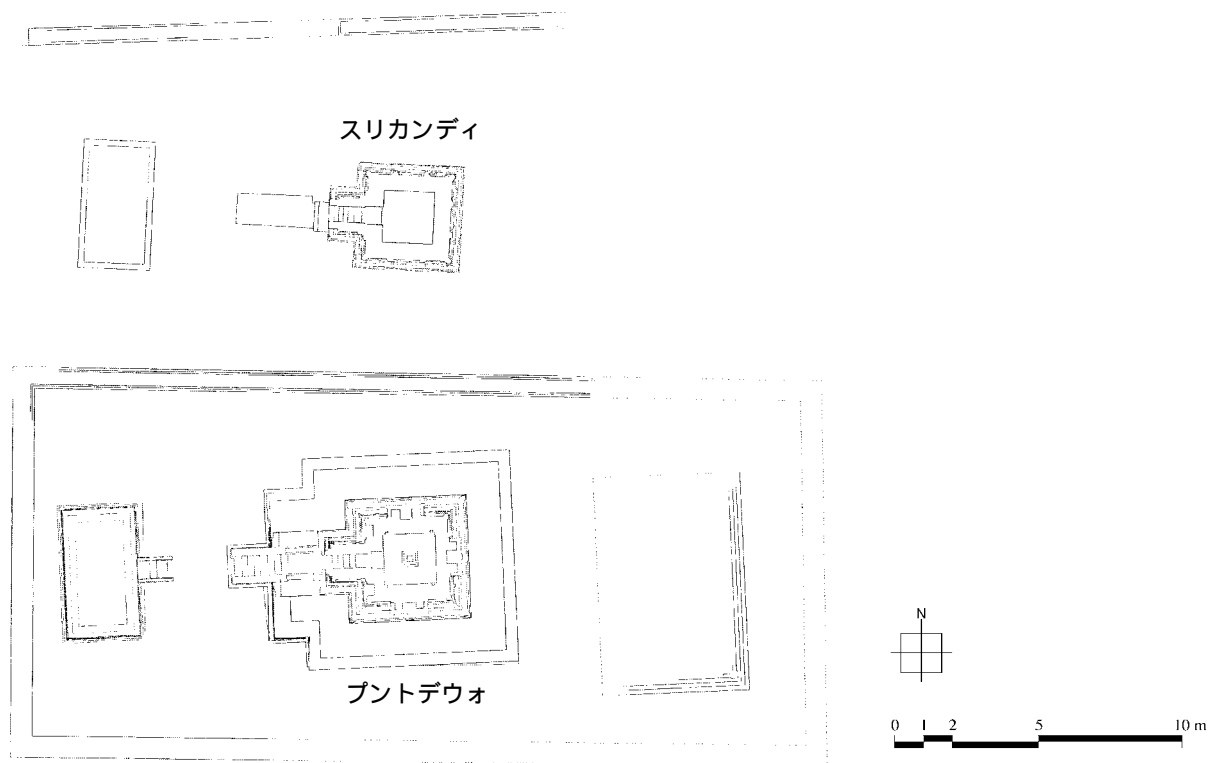


図 18 チャンディ・スリカンディ、プントデウォ 配置図

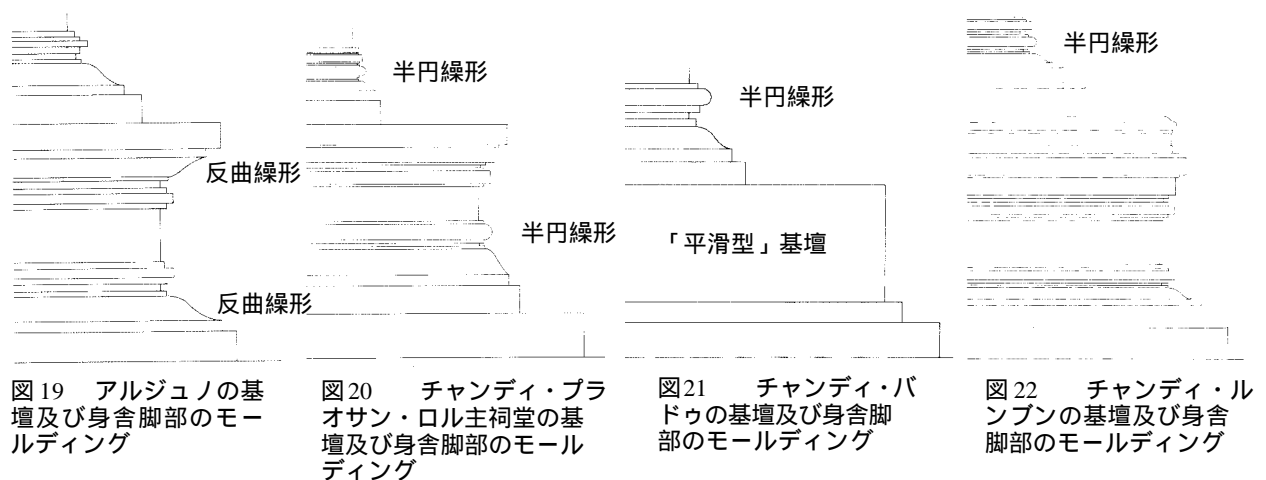
の伽藍構成を有する寺院でも確認される⁽⁴⁶⁾。さらにアルジュノの伽藍で特筆されるのは、東西に走る中央軸を持つ二基の祠堂が、囲繞壁で取り囲まれた寺院敷地のほぼ中軸線上に左右対称に配置されている点である（図 16）。すなわち、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院は、スマールの両側に二基の副祠堂を配し、また敷地中心点を避けるべく祠堂群がずらされるなど、アルジュノの伽藍配置が一段と発展したものとみることが可能である。

一方、アルジュノに近接するプントデウォの伽藍は、短辺に比して長辺がかなり長い矩形となっており、また囲繞壁と祠堂は平行に配せられていない（図 18）。その伽藍は左右対称形にはならないが、これまでに筆者が論じてきた中部ジャワ南部のシヴァ教寺院にみる非対称の伽藍構成とは明らかに異なっている。

荒廃甚だしいジャワのチャンディの中にあって、中部ジャワ南部に現存する主要なヒンドゥー教寺院の殆どが非対称の伽藍構成を有するものであり、またその伽藍構成は、後代の東部ジャワ期のシヴァ教寺院にも継続して用いられているという点を考慮すれば、古式を残すとされるディエンの遺構における上記の伽藍配置は、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院にみる非対称の伽藍構成が成立する以前の配置型式であると推測される⁽⁴⁷⁾。

4. モールディング構成及び基壇型式にみる相違点

チャンディの基壇のモールディング構成についても、アルジュノは祖型とみるに相応しい特徴を備えている。まず、ベース及び上端の持ち送り部分が凸形反曲状に象られ（以下、反曲線形と呼ぶ）、またその間に挟まれた胴部の上・下端に、直角断面からなる帯状の突出部が挿入されている（図 19）。拙稿で既に述べたように⁽⁴⁸⁾、アルジュノ以外の祠堂建築の基壇のモールディング構成は、帯状の突出部分が半円状に彫り出されたり（以下、半円線形と呼ぶ）、あるいは装飾帯が挿入されるなど様々なヴァリエーションを持つが、原則としてアルジュノの基壇にみるモール



ディング構成を祖型とした上での変化形としてみる事が可能である。そして、こうした腰の括れた造形からなるモールディングの構成は、基壇上の身舎側壁のモールディングにも共通して認められるものである。

しかしながら、グヌン・ウキル、バドゥ、サンピサリ、イジョーの基壇は、浮彫りや線形を一切持たない平滑な断面からなっており(図21、以下、「平滑型」基壇と呼ぶ)、上述のモールディング構成とは基壇の型式が異なっている。とりわけグヌン・ウキルは、「平滑型」基壇が確認される最古のチャンディである点が特筆される。さらにバドゥの「平滑型」基壇の上の身舎脚部には、中部ジャワ北部のシヴァ祠堂には殆どみられない半円状に彫り出された半円線形の認められる点が注目される(図21)。従来の研究において、半円線形を有するモールディングの構成は、仏教を奉じるシャイレンドラ王朝によってもたらされたものとされているが⁽⁴⁹⁾、半円線形の存在が確認される遺構として最古のものは、シヴァ教寺院のバドゥである点に留意しなければならない。

千原氏は、上記のモールディング構成の中に、半円線形のような曲線断面、さらには歯飾りのような装飾帯を有するタイプを「南方型」(図20)、そして反曲線形以外には曲線断面の線形を一切含まず、すべての凹凸が直角のみに終始しているアルジュノのようなタイプを「北方型」と命名し、中部ジャワ期の主要なチャンディの基壇及び身舎脚部のモールディングの類型化を行っている⁽⁵⁰⁾。千原氏の研究において、中部ジャワ北部に現存する数多くのチャンディのモールディング構成が「北方型」、また中部ジャワ南部のチャンディのそれが「南方型」を基調とするものであることが明らかにされた点は極めて重要である⁽⁵¹⁾。

そしてまた、「平滑型」の基壇がディエンやグドン・ソングのシヴァ祠堂には認められない点を踏まえつつ、そのオリジンを「南方型」系に属するものと位置付けた上で、「平滑型」基壇のみを残すグヌン・ウキルの身舎が、半円線形を有する「南方型」系のモールディング構成からなっていた可能性について論じている点は注目に値する⁽⁵²⁾。筆者が現地で調査を行った際に、グヌン・ウキルの敷地内に瓦礫状に堆積された元の建材の中から、半円状に彫り出された切石が散見されたことから、千原氏の見解を推測として簡単に斥けることはできないと思われる。

しかしながら、その二系統のモールディング構成が、いずれかの方が古い型式で、他はそれから発展したというのではない、すなわち、インドからの二つの異なる文化導入のルートの下に並行的に成立したとする千原氏の立論⁽⁵³⁾に対しては、筆者は意見を異にしている。筆者は、モールディング構成を含めて祖型とみるにふさわしい中部ジャワ北部山間地の一群のチャンディが、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせたものと考えている。

千原氏がモールディング構成の双系的な展開を論じる上で根拠としているのは、両系統の混用例、例えば「北方型」の基壇の上に「南方型」の身舎を載せるなどの遺構が存在しないという点である。しかし、クドゥ南部に所在するシヴァ教の祠堂であるチャンディ・ルンブン（Candi Lumbung）は、半円線形以外には曲線断面を一切含まない基壇⁽⁵⁴⁾の上に、半円線形を有する「南方型」系の身舎を載せた建築構成を有している⁽⁵⁵⁾（図22）。また「南方型」系とされる「平滑型」の基壇を有するチャンディ・サンビサリの身舎には、「北方型」のモールディング構成が確認される。

そして、アルジュノに代表される中部ジャワ北部のシヴァ教寺院が、祠堂の建築構成、細部意匠、尊像配置等の面で、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院の祖型とみるに相応しい特徴を顕著に備えている点については既に指摘した通りである。こうした建築ないし美術の様式上の一貫した規範性に鑑みれば、半円線形を有するモールディング構成及び「平滑型」の基壇は、祖型となる北部山間地のシヴァ教寺院のモールディング構成及び基壇型式の発展型ないし変化型と捉えるのが適当であると考えられる。また、半円線形及び「平滑型」基壇の確認される最古の遺構が、いずれも非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院である点は極めて重要である。半円線形及び「平滑型」基壇という新たなモールディング構成及び基壇型式の導入に伴って、非対称の伽藍構成が創出されたとみるのが妥当であろう。すなわち、半円線形、「平滑型」基壇、そして非対称の伽藍構成は、遅くとも732年頃（グヌン・ウキルの推定建立年次）までに、中部ジャワ南部にもたらされた新たなシヴァ教の寺院建築にみる様式上の特質であると考えられる⁽⁵⁶⁾。

第5節 小結

以上、中部ジャワの北部山間地に造営された古式を残すシヴァ教寺院にみるモールディング、基壇の型式が、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせた結果、それに伴って遅くとも732年頃までに、非対称の伽藍構成が成立するに至ったと考えられる点を指摘した。このような建築様式にみる変化ないし進展が、インドの新たな文化的な潮流を摂取した結果生じたのか、あるいはジャワにおける自律的な発展の下に生じたのかという問題を検討することはできなかったが、この点については稿を改めて論じることにはしたい。

一方、中部ジャワ北部から南部への単純かつ直線的な建築様式の発展という文脈では解釈できない事例も存在する点には留意しなければならない。例えばディエンには、いわゆるチャンディの基本型から逸脱した特異な建築構成を有するチャンディ・ビモ（Candi Bima）のような祠堂も認められる。また、中部ジャワ北部のスンピン山東麓には、「平滑型」基壇を有するチャンディ・プリガプス（Candi Pringapus）の存在が確認される。さらに、グドン・ソングの第三コンプレックスの副祠堂は、例外的に「南方型」のモールディング構成を有するものである。この副祠堂のカーラは、後の東部ジャワ期のものにみられるような下顎を有するものであり、中部ジャワ期のカーラとしては稀な例であることからみて、第三コンプレックスの副祠堂は、後代に増設された建築である可能性が高い。すなわち、北部山間地に営まれたジャワ最古のシヴァ教チャンディが、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせた後に、再び北上して寺院造営活動を再開した可能性は考え得るし⁽⁵⁷⁾、あるいは一旦南下した後であっても、中部ジャワ北部の地に留まって寺院の造営・運営に携わっていた勢力が残存していた可能性も考慮しなければならない。

- (1) 例外的にチャンディ・ロロ・ジョングランでは、シヴァ神像を安置する主祠堂の南・北側に、各々ブラフマー及びヴィシュヌ神の像を安置する祠堂が配置されている。さらに、内苑の南北に各一棟ずつ配置されているチャンディ・アピット (Candi Apit) と呼ばれる建物も、他に類例を見出し得ない。チャンディ・アピットの内、北側の建物にはシヴァの神妃ドゥルガーの像が安置されていたとみられる点が指摘されている (Jordaan, Roy E. ed, *In praise of Prambanan: Dutch essays on the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: KITLV Press, [Translation Series 26], 1996, pp. 87-88)
- (2) この問題に関する千原氏による見解は、本章において改めて検討を行うものとする。
- (3) Casparis, J. G. De, *Inscripties uit de cailendra-tijd*, Bandung, 1950
- (4) 前掲書注 (3) pp. 100-101
- (5) 岩本裕「Sailendra 王朝と Caṇḍi Borobudur」『東南アジア - 歴史と文化』No. 10, 1981, p. 18
- (6) 前掲書注 (3) pp. 125-126
- (7) 前掲書注 (3) pp. 24-50
- (8) 前掲書注 (3) pp. 50-73
- (9) 前掲書注 (3) pp. 73-95
- (10) 前掲書注 (3) pp. 108-109
- (11) Soekmono, R., *Chandi Borobudur; a Monument of Mankind*, Paris: Unesco Press, 1976, p. 9
- (12) Naarssen, F. H. van / R. C. de Jongh, *The Economic and Administrative History of Early Indonesia*, E. J. Brill, Leiden / Köln, 1977, 深見純生「ジャワ古代史の再構築 - シーマ定立の政治経済学」『岩波講座 世界歴史 南アジア世界・東南アジア世界の形成と展開』岩波書店, 1999, pp. 361-362
- (13) 前掲書注 (12) , 前掲書注 (12)
- (14) Kusen, “Raja-raja Mataram kuna dari Sanjaya sampai Balitung: Sebuah rekonstruksi berdasarkan prasasti Wanua Tengah III”, *Berkala Arkeologi*, edisi khusus, tahun XIV, 1994, pp. 82-94, 深見純生「古マタラム王統再構成 - ワヌア・トゥンガ第三刻文による」『桃山学院大学総合研究所紀要』第 26 巻第 3 号, 2001, pp. 91-105
- (15) Dumarçay, J., *Histoire de l'architecture de Java*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques 19], 1993, p. 287
- (16) Jordaan, Roy E., *Imagine Buddha in Prambanan; Reconsidering the Buddhist background of the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: Vakgroep Talen en Culturen van Zuidoost-Azië en Oceanië, [Semaian 7.], 1993; 前掲書注 (3) pp. 3-115
- (17) 石井和子「『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (聖大乘論) 』にみる古ジャワの密教」『東南アジア研究』27 巻 1 号, 1989, p. 58
- (18) 前掲書注 (5) pp. 17-21
- (19) Soekmono, R., *Tjandi Merak*, Skripsi Sarjana Universitas Indonesia, Jakarta, 1953, p. 23; Bernet Kempers, A. J., “Prambanan, 1954”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p.8
- (20) Vogler, E. B., “De stichtingstijd van de Tjandi's Gunung Wukir en Badut”, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 108, 1952, p. 316
- (21) Poerbatjaraka, *Riwajat Indonesia* Djilid I, Djakarta: Jajasan Pembangunan, 1951, pp. 53-55
- (22) 前掲書注 (20) p. 315
- (23) Soekmono, R., “The archaeology of Central Java before 800 A.D.”, in R. B. Smith and W. Watson ed., *Early South East Asia; Essays in archaeology, history and historical geography*, New York, Kuala Lumpur:

- Oxford University Press, 1979, p. 462
- (24) Krom, N. J., *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche kunst*, Vol. I, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, [First edition 1920], 1923, p. 166
- (25) Verbeek, R. D. M., *Inventaris der Hindoe-oudheden op den grondslag van Dr. R. D. M. Verbeek's Oudheden van Java*, in: *Rapporten van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indië 1915*, Batavia: Albrecht, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1918, p. 262
- (26) 前掲書注 (23)p. 462
- (27) 千原大五郎「中部ジャワのチャンディ建築に対する編年的考察」『日本建築学会論文報告集』第 238 号, 1975, p. 135, 138
- (28) Dumarçay, J., *Candi Sewu dan arsitektur bangunan agama Buda di Jawa Tengah*, Jakarta: Puslit Arkenas, [Originally published in France, Paris: EFEO, 1981; translated by Winarsih Arifin dan Henri Chambert-Loir], 1986, p. 42
- (29) 前掲書注 (28)p. 39 の注 3)
- (30) 前掲書注 (28)p. 6
- (31) 前掲書注 (28)p. 42 の注 14)
- (32) 前掲書注 (28)p. 42
- (33) 前掲書注 (28)p. 39 の注 3); Dumarçay, J., *The temples of Java*, Singapore: Oxford University Press, 1986, p. 42
- (34) 前掲書注 (20)pp. 313-346
- (35) 前掲書注 (23)pp. 462-463
- (36) 前掲書注 (27)p. 139
- (37) Dumarçay, J., *Le savoir des maîtres d'œuvre Javanais aux XIII^e et XIV^e siècles*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques XVII], 1986, pp. 5-6
- (38) Haan, B. De, "Tjandi Badut", *Oudheidkundig verslag* 1929, Albrecht, 1930, p. 257
- (39) 図 5 のトレンチ a, b, c に, 囲繞壁の隅とみられる直角部が掘り当てられたという Sumarno, A., *Laporan Penggalan Pengumpulan Data Candi Badut di Malang*, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Kantor Wilayah Propinsi Jawa Timur, Bagian Proyek Pelestarian/Pemanfaatan Peninggalan Sejarah dan Purbakala Jawa Timur, Surabaya, 1992/1993, pp. 14-16 の記述に基づいて, 敷地中心点のおおよその位置を求めた。
- (40) スクモノは, アルジュノの推定建立年次を 650~730 年頃 (前掲書注 (23)p. 472) に位置付けている。一方, 千原氏は 680~730 年頃 (前掲書注 (27)p. 140), またデュマルセは 750 年頃 (前掲書注 (15)p. 287) としている。
- (41) 千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会, 1975, pp. 99-103
- (42) 仏教の祠堂の場合, ラトナの代わりに飾りストゥーパが配せられる等の相違はあるが, 基本的にアルジュノの建築構成が祖型になっていると考えることが可能である。また, ジャワのチャンディの平面及び立面の構成を拘束する規範性については, 小野邦彦・中川武・河津優司・御船達雄・池亀彩・梅ヶ枝浄・鈴木菜穂子「チャンディ建築の平面の類型 - インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究()」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, pp. 545-546; 梅ヶ枝浄・中川武・河津優司・小野邦彦・御船達雄・池亀彩・鈴木菜穂子「チャンディ建築の立面構成 - インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(-2) 」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, pp. 549-550; 小野邦彦・河津優司「インドネシア, ジャワ島のチャンディ」『アジアの歴史的建造物の設計方法に関する実測調査研究』(文部省科学研究費・研究成果公開促進費採択刊行図書) 第 2 篇, 早稲田大学アジア建築研究室, 1999, pp. 40-45, 51-52 を参照のこと。
- (43) シヴァ祠堂における尊像の典型的配置について, 詳しくは前掲書注 (42) pp. 43-44 を参照され

- たい。
- (44) しかしながらディエンからは、出所不詳のガネーシャ、ドゥルガー、アガスティアの像が多数発見されている点は特筆される。
- (45) 前掲書注(33) p. 14。ディエンのチャンディ・プントデウォから、ヨーニ及びナンディンの像が発見されたことが、オランダ領東インド考古局による考古学遺跡・遺物目録から確認されることから（前掲書注(25)p. 338）、プントデウォの類例とみられるアルジュノに正対するスマールに、ナンディン像が安置されていた可能性は十分にあると思われる。
- (46) シヴァ祠堂の正面に配置される副祠堂にナンディン像の安置されていることが確認されるのは、グヌン・ウキル、ロロ・ジョングラン、イジョーである。
- (47) グドン・ソングの遺構群においては、囲繞壁の存在自体が確認されていないために、祠堂群の「ずらし」の有無を判別することはできない。一方、ディエンに存する八遺構の内、アルジュノ、スリカンディ、プントデウォを除く五遺構は祠堂一基のみからなるチャンディであり、また囲繞壁の存在も確認されていない。
- (48) 池亀彩・中川武・河津優司・小野邦彦・御船達雄・梅ヶ枝浄・鈴木菜穂子「チャンディ建築の立面計画／モルディングの類型-インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(-1) 」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, pp. 547-548; 前掲書注(42) pp. 46-50, pp. 51-52
- (49) 前掲書注(23)p. 463
- (50) 前掲書注(27)pp. 136-137; 千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会, 1982, pp. 122-132
- (51) しかしながら千原氏は、クドゥ南部に「北方型」のチャンディが営まれていた可能性は否定していない（前掲書注(50) p. 131）。
- (52) 前掲書注(27)p. 137; 前掲書注(50) p. 125
- (53) 前掲書注(27)p. 137; 前掲書注(50) pp. 123-124
- (54) ただし、ルンブンの基壇の持ち送り部分には帯状の装飾浮彫りが挿入されている点には注意しなければならない。ルンブンの基壇は、反曲線形以外には曲線断面を一切有しないにも係わらず、装飾帯が彫り出されており、千原氏のいう「北方型」と「南方型」の両者の特徴を兼ね備えたものであるといえよう。また、プランバナ地域（バラン）のヒンドゥー教チャンディであるチャンディ・パロンの基壇も、反曲線形以外には曲線断面を有しない一方で、帯状の歯飾りが浮彫りされており、これも「北方型」と「南方型」の混用例とみるのが妥当であると考えられる。
- (55) クドゥ南部の仏教チャンディであるチャンディ・ガウェン（Candi Ngawen）第二祠堂も、「北方型」の基壇の上に「南方型」の身舎を載せた遺構である（前掲書注(48) p. 548 参照）。
- (56) スクモノは、バドゥの建築全体の構成が古式を残すものとしながらも、グヌン・ウキル及びバドゥのカーラ・マカラ装飾を、ディエンのそれと比べて新しいものとして位置付けている（Soekmono, R., “Indonesian Architecture of the Classical Period: A Brief Survey”, *The Sculpture of Indonesia*, Washington: National Gallery of Art, 1990, p. 69）。そしてこの点については、本文で述べたフォグラウの見解にスクモノは同調しているといえるだろう。こうしたカーラ・マカラ装飾にみる変化は、筆者が本文で明らかにした寺院建築様式の変化に対応したものとみれば納得が行く。
- (57) 東部ジャワのマラン近郊にあるチャンディ・バドゥが、760年の銘あるディノヨ碑文を建てた社会集団に帰せられる可能性が高い点は本文中で既に述べた。そしてチャンディ・バドゥと、クドゥ南部にあって732年の建立と推定されるチャンディ・グヌン・ウキルの建築様式が種々の点で類似し、また8世紀の中頃には仏教を奉じるシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に急激な台頭をみせたことを併せて考慮すれば、シャイレンドラ王朝の興起に伴う政治情勢の変化に伴って、ヒンドゥー教勢力の一部が東部ジャワへ移動した可能性も考えられよう。それと

同じように、中部ジャワ北部へと移動したヒンドゥー教勢力のあった可能性も考慮されるべきであろう。